

しさんの場合

息子さんが重度の知的障害を伴う自閉症（当時小5）

居住地：仙台市宮城野区

インタビュー日：2024年5月29日

お話：しさん

聞き手：橋本武美

橋 3.11のときに、息子さんはおいくつでしたか？

し 小学校5年生だったと思います。

橋 あ、うちと1歳しか変わらないんですね。

し たしか1歳上だったかなと思います。

橋 ちなみに、支援学校とか支援学級とか、どちらでしたか？

し 支援学級でした。地元の支援学級ではなく、隣の学区の小学校の支援学級。お兄ちゃんと小学校を分けて入れたので。

橋 それは、分けたくてってことですよね？

し はい。分けたくて、無理やりお願いして。

橋 みなさん、悩むところですよ。きょうだい児と、あとから離す人もいるし。

し そうですね。うちはもう頑張ってる。当時、そういうのってあまり理解されていなくて。

橋 越境はけっこう大変でしたよね。

し 大変でした。でも、地域的には5つくらいの小学校の真ん中辺にあるところなので、どこに行ってもいいと思うんだけど。やっぱり学区の縛りがあってね、なかなか。

橋 けっこう学校が多い地域ですよ。宮城野区の。ごきょうだいは上ですか、下ですか？

し 上です。二つ違いの兄がおります。

橋 お兄ちゃんは、地域の小学校に入っています。

し 兄はね。で、弟は隣の地域の小学校に。

橋 頑張ってる闘ったんですね（笑）。

し はい、闘いました。闘いましたよー、小学校に入るときも。つねにその闘いはね……。

橋 ね、わかります。

し 節目、節目でありますね（笑）。

橋 私も息子を小学校に入れるときに、みなさんやっぱり、支援学校なのか支援学級なのか、普通級からスタートするかとか、悩みどころなんですけど。もちろん地域の学区の小学校で……でもうち、隣学区の小学校のほうが近かった。学区のへりのところだったので。なので、近いほうの隣の学区の小学校も体験させてもらって。支援学校もこっちもあっちも観て。それで最終的に、その隣学区の近いほうの小学校の支援級か、光明支援学校かどっちかで悩んだんだけど。最終的には本人が光明で、ものすごく居心地が良い体験をしていたので、遠いけどここなんだなって。

し お疲れさま。

橋 もし隣学区の支援学級に入れたかったら、闘わなきゃいけないなって、ちゃんと覚悟をして、そのつもりで。その支援学級に、ベテランのすごくいい先生がいて「いいよ、おいで」って言ってきて。「ただ私はここに8年いるから、そろそろ（異動の）声がかかるかもしれないのよ」って言っていて、それで本人が支援学校を選んだあとに、やっぱりその先生は異動になってたの。だから、あ、支援学校で正解だった！と思いました。

し なるほどね。

橋 障害が認定されたのは、何歳くらいのときに？

L 2歳半です。やはり動きが多くて、言葉がまったく出ず。

橋 多動ですね。

L 多動ですね。兄の場合は、言葉はしゃべれるけど動きがすごく遅かったのがね。下の子はその逆で、歩いたり動いたりするのはすごく早くて、言葉が遅いんだなあぐらいの……。

橋 まあ、タイプが違うんだあって。

L そう。そんな感じでゆったり構えていたら、周りに保育士の経験をしていた人がいて、その方からアーチルを紹介されて、行きました。そしたらもう、自閉症的傾向とか言われちゃって。

橋 最初からアーチルだったんですね。

L そうですね。保健所とかではあんまり気にされなかったのかな。

橋 わりと3歳児検診とかで「ちょっと気になるね」とか、多動ですごく目立つとか、お母さんが傷つく体験をしたりだとか。それで、徐々にアーチルを紹介されてという方もいますけど。じゃあ、近くにわりと気づいてくれる人がいたんですね。

L そうですね。「大丈夫だと思うけど、安心するためにもアーチル行っておいで」って、紹介していただきました。

橋 2歳半の段階で、診断名とか付きました？

L 「傾向」と言われたかな。

橋 それで経過観察みたいな？「傾向がありますね」って。

L そうですね。でもすぐに、母子通園施設を紹介されました。それでまあ、診断名こそ言わないけど、自閉症的傾向ってことだね。

橋 じゃあもう、母子通園？

L はい、しましたね。そのあとすぐに申し込んで。

橋 母子通園は何年通ったんですか？

L えっと、1年半くらいかな。年中から幼稚園。なかよし学園っていう仙台市の。

橋 鶴ヶ谷の？

L はい。

橋 そうか。あれ、母子通園は鶴ヶ谷ではなかった？

L あおぞらホームがいっぱいで。

橋 そうなんだ。うちはあおぞらだった。

L そうなんだ。あおぞらはいっぱいだったんですよ。それで、白鳥たんぼぼホーム。

橋 白鳥で母子通園に行ったあとに、年中からなかよし学園に行って、そのあとに……？

L そのあとに闘いをおこして、普通学校の支援級に、しかも越境で入ったわけですね。

橋 そうか。それは、やっぱり最初は（遠くの支援学校ではなく）地域のところに入れたい……？

L いや、私的にはそんなに強い思いはなかったんですけど。なかよしに入る前も、保育所選びでいろんなところを見学し体験させたんですね。そのときに、ある保育所の所長先生が、「小さい時期は、子どもから受ける影響ってものすごくあるんだよ」って。その言葉がずーっと残っていて。できれば小学校は、子ども同士から受ける影響で、なんだろうね、頑張ってみたい……。

橋 同年代のね。育ち合う感じ。

L そうそう。そこで頑張ってみようかなって。たぶん、お世話する人も出てくるだろうし、まあ、ちょっと変わってるから変な目で見られる人も出てくるかもしれないけど、でも自分の子が、そのなかの何分の一で、みんなから注目を浴びてもいいじゃないかと。良い影響を受けられるなら。たとえば運動会でね、頑張って最後まで走って拍手をもらうみたいな。そういうのってすごく恥ずかしいけど、みんなに感動を与えたりとか、先生たちも喜ばれるかな、と。それでもいいかなという思いで。それで、普通学校の支援クラスを選びました。

橋 そこはまた別々の学校にしたから、さらに安心するというか。お兄ちゃんのほうには影響が出ない。

L お兄ちゃんもゆっくりの子だったので、同じ学校だったら、それによってイジメとか生じるかなというのがあったので。

橋 そこはみなさんすごく悩むとお聞きます。

L 悩みました。

橋 うち是一人っ子だからなことだけど。(いろいろお母さん方から) すごく聞く。それで途中から支援学校に移るとか、ありますね。

L そうそう。それも言われましたよ。毎年11月くらいになると「どうしますか？」って、教頭先生に呼ばれて聞かれてました。「いえ、最後までがんばります」と言って、頑張りましたね、6年間。

橋 ああ、そうなんだ。すごい。やっぱり強い(笑)。

L 毎日学校の送迎は大変でしたけど。放デイ(放課後デイサービス)とかも、当時はなくてね。

橋 少なかったですよ。

L 少なかった。

橋 うちの小1ぐらいの段階で、放デイができてはいたけど、週に1回くらいしか入れなかった。日数の縛りもまだまだあったし。だからうちは、2箇所に週1ずつでやりました。

L そうだったんだ。うちも最初は1箇所、主人の仕事の関係でどうしても預けなくちゃいけなくなったので、もう心を鬼にして預けて。そのあともう1箇所できたので、そっちにも預けて。

橋 どんどん増えましたよね？ ちょうどそういう時期ですよ。

L そうですね。小学校高学年くらいから、すごく増えたかなという感じ。

橋 そうか。6年生まで頑張ったなかで、震災は小5の時期だったんですよね？

L はい。

橋 ちょうどその時期って、支援学校とかだと卒業式だったりしたんですけど。その時間どこにいました？

L えっと……その時間は、子どもは学校にいました。

橋 教室のなか？

L だったと思います。ちょうど放課後。14時46分だったので。帰りの支度とか掃除とか。

橋 デイサービスとかは、送迎がもう来たりしてて。ちょうど送迎車に乗るかどうかみたいな、微妙な時間ですよ。

L うん、そんなところでしたね。

橋 教室のなかに、みんなと一緒にいたんですか？

L いたんです。

橋 じゃあ先生に誘導されて？

L そうですね。私が迎えに行ったときは、校庭でちゃんと並んで座って待ってました。全員、校庭で引き渡しをしていたので。

橋 一応全員、親御さんとか迎えに来る人が必ず来て、引き渡すっていう。

L そうですね。

橋 日頃から送迎をやられてたら、学校側も「あ、お母さんが来るんだ」って。

L そうですね。

橋 わりとすぐに迎えに行けました？ お母さん自身はどこにいたんですか？

L 自宅のそばで、主人の仕事の用意をやっていたときで、だからわりとすぐに迎えに。

橋 屋内？ 屋外？

L 屋内にいました。

橋 どうでした？物が落ちてきたりとか？

L すっごい揺れで、古い家にいたので、もう怖くて。テーブルの下にいったん隠れて。落ち着いたと思って外に出たら、今度またすごいのがきて。車を押さえながら、ぐらぐら揺れて。ああこれは大変だっていう感じで。長かったですからね。

橋 長かったー。

L 向かい側に会社があって、そこの女の子たちが泣きながら「怖い、怖い」って出てきて。「揺れがおさまるの待とう」って一緒に待って。

橋 で、息子さんを迎えに行かなきゃって。

L そうですね。たまたまそこに自分の車も置いてたので、そのまま45号線に出て。なかなか出られなかったですけど。

橋 車、すごかったですよ。

L 多かったですね。そしたらなんか偶然にも主人も戻って来てて、会ったんですよ、45号に出たところで。

橋 え？車同士？

L 主人は歩いてたのかな、わかんないけど、会ったの。それで、私は下の子を迎えに行く、主人は上の子を迎えに行くからって、そこでコンタクトがとれて。どこどこで待っててねって約束までして。それで、そのまま約束の場所で落ち合うみたいな形になり。携帯とか使えないからね。

橋 ぜんぜん繋がらなくなりましたね。最初だけちょっと繋がって、すぐ繋がらなくなった。え、でもそれびっくりですね。

L そうです。ほんとうにびっくりしました。

橋 落ち合う場所を決めることができたし。どっちがどっちに迎えに行ってるって、ちゃんとわかってる。そうしないと、ふたりで下の息子さんのほうに行っちゃうとかあるだろうし。

L そうそう。だからそれは、我ながら振り返るとびっくりしました。

橋 それで、学校に迎えに行って、じゃあ引き渡しはわりとスムーズに？

L そうですね。で、そこから先が車が進まないんだよね。

橋 車に乗せて。なかなか道路もね、信号も消えているし。車は遅々として進まない。45号線もそうだったんですね。

L うん。そして家に入ったらもう……住めるどころの騒ぎじゃない。全部ひっくり返ってたので。だから、これはもう約束した場所で、そこに避難させてもらおうっていうふうに決めて。

橋 ちなみに、避難所ですか？

L 避難所じゃないです。一般に開放された、ある宗教団体の会館です。

橋 わりと大丈夫な建物？

L 大丈夫でもないけど、大丈夫でした。大きい所は、なんか上からも天井が抜けて照明が落ちてきたとか。でも私たちは、そんな大きいところではないところに避難できたので、そこで最低限の毛布とかゲームとか取り出して、車に載せて行って、そこでお兄ちゃんとも合流して、かな。

橋 ご自宅は物が落ちたりとかもそうだけれど、ヒビが入るとかそういうようなことは？

L ありましたね。半壊でした。マンション全体が。

橋 わー、あの辺もそうだったんですね。

L すごかったですね。ヒビが入ったけど、えーこれ半壊？みたいな感じ。

橋 へえー。で、落ち合った場所で、家族みんな揃って……。

L でも主人は仕事柄もう行かなきゃなくて、いろんな、津波の影響とかあるところに行きましたね。だから、あとはもうここにいるっていう場所だけ決まったので、主人とはそのあと3、4日間ぐらい会うことはなかったですね。

橋 すぐに戻っては来れないだろう、と。

L はい。そういう感じでしたね。

橋 でも、子どもたちはお母さんと一緒にいて。そのときに、支援級の下のお子さんの様子はどうでしたか？わりと揺れでグラグラになっちゃう子もいるし、固まるようなお子さんもいると聞くんですけど。

L 固まったんじゃないかな。けっこう不安定になりましたよね。いまだに地震が来ると、もう起き上がって「地震、地震」っていう素振りを。

橋 でも、3.11のそのときは、たぶんなにが起きたかわからないですよ。なにが起きたかわからなくて、なにもできない。

L そうですね。ただ恐怖はあるんじゃないかな。そして、その避難所生活がね……。

橋 ざっとどのぐらいの人数の？

L 人数けっこういましたよ。何畳あるのかな。20組か30組くらいはいましたね、一部屋に。畳の大きい部屋があって、私たちのエリアはちゃんと確保できたんですけど、動くから……。

橋 じっとしてられない。

L そう。3人で動くか、もしくは1人で動くときはかならず下の子をどっちかが見てるみたいな感じで。おさえて

いる感じですね。

橋 地震のときは固まる感じだったけど、避難先では家族揃っていて、でもとにかく人がわやわやしてるから落ち着けないですね。

L とにかく奇声をあげないことだけは、願ってましたね。

橋 寝れましたか？

L 3人で寝てましたね。寝るのは大丈夫でした。

橋 落ち着けないけど、寝れて。ある程度食べることもできました？

L そうだね……偏食が強かったんで、差し入れのおにぎりぐらいはなんとか食べたかな。あとは、食べられるものは、いまでは信じられないんだけど、無くてね。ごはんも、食べられたのはヨーグルトとかりんごジュースとかさ、そのくらいしか食べられなかった。偏食が強かったんで。

橋 ごはんは食べれた？

L 食べれた。

橋 じゃあおにぎりは大丈夫？

L 食べれた。

橋 よかった。避難先では、おにぎりとか配られたりはあった？

L ありましたね。けっこう周りの工場とか他県からの物資が届いたりとか。

橋 でも食べられるものが限られているから……。おにぎりはOK。飲み物とかも？

L 水も飲みました。大丈夫でした。

橋 うちの息子は、お水が飲めない。麦茶は飲めるけど、お水はそのままと飲めない人だったので。

L うちもそうでした。でもなんとかそれは、飲めるようになりました。

橋 あの地震をきっかけに、食べられるものが増えたり、飲めるものが増えたりとかけっこうして。仕方なく、本人も受け入れる（笑）。

L 諦めるしかなかったんですね。

橋 それは感じ取っていて。なにかが起きたんだ、違う状況なんだってね。

L それはあるかもしれない。

橋 感じ取ってましたよね。それ以外に、避難先で困ったことってなんですか？ ちなみにどのくらいの期間そこに？

L 3日間。お風呂とか入れなかったからね。トイレとかも水が流れないから、携帯用のやつとか渡されて。

橋 携帯トイレみたいな？

L あ、トイレには行くんですけど、そこでいつもとは違うものが置いてあったりするの。男性トイレには私が入れないから、お兄ちゃんにそれはもう任せっぱなしでやってもらったりとか。

橋 じゃあ、お兄ちゃん大活躍。

L ほんっとに助かりましたね。お兄ちゃん中1だったのかな、そのとき。2つ違いだったので。

橋 中1で。そっか、頑張った。

L 頑張りましたね。

橋 お兄ちゃん存在、大きかったですね。

L そうそう、いまも大きいけど（笑）。

橋 だって、お兄ちゃんいなかったら、お父さんはいつ戻って来られるかわからないし。トイレ、本当困りますよね。

L 困りましたね。当時はまだそんなに、ひろびろトイレとかって確保されてなかったからね。

橋 あのときは、基本流れないとかで、きれいでもないし。

L そうそう。固まるやつとかはあったのかな。それで固めて捨てるみたいな。

橋 凝固剤みたいなのね。

L そうそう。大変でしたね。

橋 うちの避難所には行かなかったんで。家がマンションなんだけれど、大丈夫だったから、まだ本人が安心できる場所にいられて。ただトイレは流れないけど。

L だよー。大変だったね。

橋 流れないけど、流しちゃうんだよね。

L ね、だってそれは決まりだからね。流れるもんだと思っちゃうから。あと、周りの人の目がすごく気になったかな。でももうお願いするしかないから、しょっちゅう頭下げてましたけどね。でも1回脱走したんですよ。脱走していなくなって。

橋 時間帯的には？

L 日中。いなくなった！って。それで、探しに行ったら自宅にいたの。そんなに距離はなかったの、歩いて10分くらい。でも45号のあの広い道路を……。

橋 うーん……怖いですね。

L ね。急いで行って、連れ戻してっていうことは1回ありましたね。

橋 近いからわかりますよね。

L そう、自宅のマンションで見つけて。

橋 うちはそのだよなって、わかっているだろうし。どうしてここ（避難先）にいなくちゃいけないんだろうって思っているだろうし。

L そのときに、マンションでお年寄りの方が、エレベーターが動いていないから階段で一生懸命降りているところを、私は階段でのぼって探して、「声もかけてくれない」みたいにあとから言われました。私はもう子どもを探すのに必死で。そのおばあさんは……。

橋 助けて欲しかったのね。エレベーター使えないから。

L そう。それで、あとから「声もかけてくれない。あの人はひどい人だ」みたいに、けっこう言われてたみたいで。

橋 うわ、キツい。

L あとから事情を話してもね、なんとも。

橋 ああ、でも傷つきましたね。そのときにそれはちょっと、キツい……。

L ね。子どもがいなくなったって言ったら、そのおばあさんだって心配させることにもなるから、「ああ、こんにちは」ぐらいしか言えないで。でもそれがなんかね、「冷たい人だわ」みたいに言われてました。それが自分では、子どももいなくなって大変な状況だったのに……というのはあったかな。

橋 いろんなね、そのときって、周りにご迷惑をっていうので……。自分ももちろん避難しているんだけど、避難先のなかで避難したい（笑）。精神的には、避難したい。そのなかで安心できる場所があれば。

L そうですねー。

橋 みんな無かったから。

L そうね。仕方ないのかなと思うけどね。

橋 みんな謝りながら……。でもそれって、なんだろう、二次避難っていうか、ね？ そのときは必死だけど、いまみたいに振り返って話していると、どうしてなんだろうって。そこが、もしこれから整備とか進んでって、そういう避難する場所のちょっとした「離れ」的なね。そういうスペースを最初から設定しておければ。

L そうですね。安心してね。

橋 3日間でもとってもしんどかったらうなと想像します。そのマンションに戻っていたところを、「ダメだよ」ってまた連れてくるもの辛い……。

L でも本人的には、もうね、もちろん部屋には入れなかったけども……。

橋 物が落ちたりとか、そういうところを見た？

L 見てないんじゃないかな。違う、見せたか。マンションで息子を見つけて、家に入って見せて、そしたら渋々と……。

橋 なんかちょっと、おもちゃ持つぐらいで……？

L なにも持たず、渋々と。

橋 でも、それでわかったかな？

L わかったんじゃないかなと思いますね。そっか、ここは住めないんだっていう。

橋 それで、連れ戻して……。

L そこからは脱走はなくなりましたね。

橋 それはやっぱり、見たことが大きかったかもしれないですね。

L そうですね。

橋 3日間過ごして、そのあとはどちらに？

L そのあとは自宅です。主人が夜中とかけっこう片付けしに戻っていたみたいで。家はすこしは住めるような状況にはなっていました。主人がかけっこう早く、パパパッとやっていたみたいで。

橋 あぶなくないように。

L そうですね。ガラスとかそういうものとか片付けてたので、自宅に戻ることができて。だけど、ガスが一番遅かったね。水道、電気は復旧してた。でもガスがダメで。

橋 ガスはかけっこう、街なか遅くなかったですか？

L 遅かったですね。それで、ストーブの上にヤカン載せて沸かしたりとか、卓上コンロでお湯沸かして、お風呂の代わりに大きいらいみみたいなにお湯いれて、身体を拭いたりとか、そういうことしてましたね。

橋 うちもガスがとにかく遅かったから、一ヶ月ちかく。一番最後ですと言われたんですよ。小田原で、街場に近い地域で、結局中心地が一番最後なんですって。数が多いからなのかはわかんないけど、一番最後ですって。そうですか……って(笑)。やっぱり、それがすごくしんどかった。うちは肌トラブルがある子だったので、しんどかったですね。ペットボトルに沸かしたお湯と水を混ぜてぬるま湯をつくり、それで頭を洗い……とかやってあげてましたね。

L そうそう。ねー、しょうがないもん、水道水とかでも洗ってたかもね。冷たかったけど(笑)。

橋 3.11の当日は雪が降るくらいだったじゃないですか。

L そうですね。寒かったですよね。

橋 じゃあ、だいたい片付けたところのマンションに戻ったんですね。そのあと、4月にも大きい地震があったじゃないですか。

L ありましたね。4月9日だけか(註:実際には4月7日)。夜中ね。

橋 みなさん、片付けとかようやく終わったくらいの時期に、ドカンと。あれはご自宅でした？

L 自宅でした。すごい声上げてました。あーとか言って。夜中でしたよね。たしか23時台でしたよね。

橋 そうでしたね。やっと片付けて、なんとかここからっていつきだったから……。

L そのとき、物落ちたりはしなかったんですけど、また外壁に亀裂が入ったんじゃないかな。

橋 やっとガスも戻ってたんですね、4月のときはね。

L そうですね。戻ってましたね。それは大丈夫だったのかな、そのまま。

橋 そういふの(ガスなど)は止まったりはしなかった？

L しなかったです。ただすごい揺れだったので、本人的には……。縦だったよね、ドンって落ちる感じの揺れで。もう恐怖。

橋 本人は、2回目だから。

L 恐怖ですね。あーって言いながら、右往左往していましたね。「大丈夫だから、大丈夫だから」って言っても。

橋 起きてた？

L 寝てた。でも、あーって言って起き上がって。なんか騒いでた。怖かったー。

橋 かけっこう、このときで心が折れたっていう人が……。

L そうですね。ほんとに。

橋 また、ドドドって落ちたっていう人がかけっこういらっやいました。

L 怖かったね。2回目のほうがなんか怖かったなあ。

橋 小5だから、学校はちょっと遅れて始まった？

L そうでしたよね。なんかちょっと記憶が……。

橋 支援学校は遅かったんですよ。光明だったから、県立は県内のすべての学校あわせてスタートするっていうことになったので。そうすると、海のほうとかはすごい時間がかかったじゃないですか。そこにあわせてなので、すごい遅かったんですよ。たぶん、仙台市の学校のほうが先に始まった。

L そうですね。

橋 じゃあ、自宅があればだし、先生たちが見に来るとかはなかった？

L なかったですね。そういうのは。

橋 なかった？ 担任が来るとか？

L なかったです。中学校も小学校もそれはなかったですね。

橋 え！ほんとうですか？

L うん。記憶にないから、たぶんないと思います。

橋 学校によるのかな……。お兄さんのほうは、地域の情報が入りますよね。学校はいつ頃から始まるとか、そういうことも。

L うん、ちょっとだけ遅れたんじゃないかなと思いますね。

橋 弟さんのほうも、仙台市の学校だから、情情的には一緒ですもんね。じゃあ、学校が始まってから「大丈夫でしたか、どうしてましたか」みたいな？

L そうですね。もしかしたら、「(家庭訪問に) 行ってもいいですか」って言われたのかもしれない。それを、私が「大丈夫ですから」って断ったのかもしれないですね。でもなんか、そういうのはあまり覚えてないですね。

橋 ちなみに、学校に避難してた人とかも、ずっとじゃなくてもいたでしょうね？

L そうだよな。いました、いました。小学校は両方とも避難所になってました。

橋 あの辺だと、商店街のところにも小学校あるじゃないですか。道路は、45号わたったところにも中学校とか、小学校とか。

L 小学校は指定避難所になってるので、両方とも。

橋 そうですね。じゃあ、たぶん避難してた人はいますね。

L たくさんいますね。

橋 でも学校が始まった頃は、体育館にそういった人たちがいるとかではなかった？

L たぶんいなかったんだと思うけど……。でも中学校とかはあったのかな。なんか中学生と協力して、避難している人たちになにかをやったっていうのは聞いたことがあったかな……。うーん、ちょっとすいません。わかりません。

橋 いえいえ。津波は来ていないところじゃないですか。ちょっと行ったら、中野とかあの辺りは水がきてたけど。苦竹あたりとかうちのあたりとかは、水はきてないから。

L そうですね。ほかの体育館とかに（避難している方は）移されたかもしれない。学校じゃなくてね。

橋 学校始まって、スムーズに行けました？上の学年に、小6にあがっているっていうことでしたよね。

L うーん。まあでも、担任は変わらなかったの。

橋 あ、支援学級で担任は変わらず。

L はい。なんとかスムーズには行けたと思います。

橋 そこはもしかしたら、配慮があったかもしれないですね。支援学級に何人ぐらいいました？あの辺の地域で。

L 最初は3人から始まったんですけどね、1年生のときは。すごい少なかったんですよ。でもだんだん増えて、当時で10人くらいいたのかな。3年生ぐらいからずっと担任は変わらなかった。3、4、5、6と4年間ずっと同じ担任の先生。

橋 けっこう長いですね。

L 長かったの。その辺はわかってもらってますね。

橋 そこはよかったですね。

L 助かりました。

橋 新しい担任だったら、ちょっとなかなか。(慣れている担任だから) 本人も「先生来たよー」っていう感じで。

L そうですね。あとは、休み中に物を購入しに行くとき、けっこう並んだりとかしましたよね。

橋 いつ買えるかわからないとか、1人3個までとか、ありましたね。

L 外を出歩くのが好きな子だったので。避難先から新田のほうへの買い物とかにも、一緒に歩いて行ったりとか。そこで、待つことを覚えたのかな。並んで。多動なんですけど。

橋 すごい。

L ずっと押さえながら。待たなきゃ買えないっていう状況で。常に3人ですけどね。

橋 そうか、お兄ちゃんもいたし。

L そうそう。それで、当時の彼の日課で、毎日プールに行ってたんですね。やっぱりプールに行きたくて、プールの状況を確認しに行きたくてしょうがなかったの。

橋 まあ、歩ける距離だから。

L そう。だから行きました。行ったらもう、休業だし。

橋 あそこ、ちょっと被害がありましたよね。

L うん、被害が大きかったの。それを見せて納得してもらって、プールはしばらく行けないよっていうのを。だから、大変さを肌で感じてもらって。

橋 見るのは大きかったんじゃないかな。そうか、でも毎日って（笑）。

L ほんと毎日。震災の前までは毎日。

橋 へー。じゃあ、すぐ再開しないことも、なんとなくでも伝わったのかな。

L そうですね。休みって。

橋 すこし納得したかな。やっぱり見ることって大事ですね。どんだけ言葉で言うよりも、何も言わずとも、見る。

L やってないよ、ってね。

橋 物が落ちてるでしょ、とかね。買い物も、みんなが並んで、みんなが順番で。

L そう。

橋 でもやっぱり、お兄ちゃんが存在が大きかったと思う。

L 大きかったかもしれないですね。私ひとりじゃできなかったような気がしますね。

橋 一番近くにある見本っていうか。見て学べる存在だから。

L そうですね。善いことも悪いこともね。ふふふ（笑）。

橋（笑）うちの息子も当時は並べなかったの。なんか、前の人を蹴っちゃう時期だったんです、ちょうどその時期。

L ありますよねー。

橋 そのあと終わったんだけど。もうあのときはぜんぜん並べなくて……。

L ね。変な声出したりさ、振り返られることも多々ありましたけど、もうしょうがないかな。すいませんって言いながら。

橋 物も、購入制限があったじゃないですか。そのへんはどうでした？ おにぎりとかだって、コンビニで1人2個までとか、最初制限があったじゃない？

L そうですよー。

橋 私、「連れて来れるなら預かりますよ」っていうデイサービスが何箇所があったので、鶴ヶ谷も、コスモスがそういうふうになってくれて。なので、とにかくうちは並ぶことができなかったから、うちも父親がいつ戻って来るかあてにならない感じだったから、食糧がそのうち困るようになるんじゃないかって。でも、すっごくストックしてたの。余分なほど。

L それはすごい。でもよかった。

橋 ストックしてたのが功を奏した。ただ、水は不安だったから並びたかったけど、並べなくて。そういうふう（預かりますよ）言ってくれるデイサービスさんのところに連れて行って、お願いしているあいだに、鶴ヶ谷の生協とかに並んで。でも1人3点まで。最初のほうの人たちで、紙ものが全部売れてしまって。どんどんどんトイレットペーパー、ティッシュペーパー、ウエットティッシュ、おしりふきが全部無くなってしまっ。「無くなりましたー」って。「え、どうしよう。あとなにが買えるの……」って。「シャンプー無くなりましたー」って。お店のなかにちょっと亀裂が入ったりとかがあったようで、御用聞きのように「ここで3点を言ってください。お店のなかを店員が見てきますから」って。「メーカーとかももちろん選ばません。なにが欲しいか言ってください」みたいな感じだったの。それで、欲しい紙ものは全部無くなって、逆に、なにを買おう、なにが残ってるんですかっていう感じだったけど。ウエットティッシュが無いなら、残っているおしりふきとか、ゼリー飲料みたいなものとか買ったのかな。あと、ビタミン〇〇みたいな、アクエリアスの粉末のやつだったりとか。そんなのを買ったのかな。だから、赤ちゃんじゃないけど、おしりふきで身体拭いてあげたりとか。コンビニもそう。本人を連れて行けないけど、「おにぎりは1人2個までなんです」とか。「えーと、すいません、でも障害のある子どもがいて」「でも1人2つまでなんです」「そう

ですよー、ああ買えないや……」と思いながら。やっぱりみんなそれぞれすごく苦労してたんだろうな。それぞれ違う苦労があったんだろうなって。

L あるもので、なんか作らなくちゃいけなかったしね。そして、電気だし。ガスがなくて。

橋 カセットコンロとかもうちはあったから。

L うち、ガスが無くてね。

橋 カセットガスのほうも、すごいあったの。

L あ、よかったね。

橋 でも、それも最初の頃に、ホームセンターとかですぐ売り切れたって。あと、ガソリンの携行缶もすぐ無くなった。

L そうそう、ほんと。

橋 そのへんも、マンションの1階にポストイトとかで、「どこどこで携行缶売ってた」とか、「どこどこのお店がお弁当出してる」とか貼られるようになり。コンビニも盗難とかの被害のあれで、全部新聞紙とかを内側から貼って、見えないようにしてたじゃないですか。だからね、うちの目の前にあったんだけど、8階なので、ずーっとしょっちゅう見て。コンビニの車が着いたら「あ、着いた！ もうちょっとしたら開く」って。でも本人と行けないし、お留守番もできなかったんだけど、でも目の前だし、そのときだけは。うちの息子もすごく大人しくなってしまったのね、やっぱり固まるほうで。まだ家で安全だから、ちょっとダッシュで非常階段から降りて行って。

L 8階？ 上ってくるのも大変。

橋 だから、上り下りを1日1回にして。非常階段を上り下りしているときに、もう1回大きい地震がきたら、非常階段が落ちるんじゃないかって思って。もう何回も上り下りしたくなかった。

L ですよー。

橋 だからリュック背負って、本人が歩けることは歩けたから、並ばないような自販機巡りとか。最初の頃は売れ残りみたいなデカビタとかがちょっと買えたり。だいたいすぐに「なんにも無いねーなんにも買えないねー」って言いながら、でも「お散歩〜」って歩いたり。それで、たまに自販機も「あ！ 補充された！」って。でも「ああ、缶コーヒー……きみは飲めないね。でもお母さんは飲めるから2つ買っとこうかな」とか。なんかそんな感じで。とにかく本人とは並べないから。本人とは散歩。

L そうかそうか。散歩も増えましたね。そういえば。

橋 それしかない。家のなかでできるお楽しみみたいなことも、ね……。息子さんもプールとか毎日行って、それは運動にもなるし、ストレス解消にもなるし。でもそれが無くなっちゃうと、その代わりになに？ って。

L お兄ちゃんの友達は、学校始まってから、うちが溜まり場みたいになってて。

橋 家にお友達が？

L そうですね。それで、買えるものでたこ焼きパーティーとか、お好み焼きとか、けっこうやりましたね。

橋 楽しいー、すごい。

L あと、お友達のお父さんが、海のほうでいらなくなったとかって、ウニのなんかもらってきたりとか（笑）。物々交換じゃないけど、そういうことをしながら、友達同士でもうまく楽しみながら、我が家が拠点のような形で、出入りが多かったの。まあ下の子も、あんまり人は好きじゃないとは思うんだけど、しょうがないなみたいな感じで。

橋 でも知らない人じゃなくて、お兄ちゃんの友達だから、そこはまだね。

L お友達のほうも、しょうがねえなみたいな感じで。息子じゃないとわからない言葉とかも、真似しながら一緒に。なんか和やかな感じでやりましたね。

橋 そのなかにまざって。

L たこ焼きのときは、おもしろかったな。

橋 いやーすごい。そういうの初めて聞きました。もちろんそういうのって、たぶんお兄ちゃんもわかってくれる子たちと付き合ってたと思うし。

L なんでしょうね、あんまり隠さないんですよ、うちのお兄ちゃん。だから、小学校も一緒でもよかったのかもしれないなって、いまになって思えばね。でも意外と中学校時代の友達は、入ってきてても、しょうがないじゃないけど、みんなそんな感じで。

橋 優しい子たちだったんだよー。

L ですね、いま思えば。偏見とかは無かったですね。まあそれなりに、普通の生活に戻るまでの間も楽しく生活してました。

橋 たまに家のなかでもお楽しみがあり。歩くのはけっこう歩けるんですもんね？

L 歩きますねー。お散歩はけっこうしますね。周り歩いたとか、あと、それこそマンションの非常階段を上から下まで（笑）。

橋 え、でもそういうのも嫌がらずに？

L 歩きたい、外に出たいからね。でも私は外はしんどいから、だから非常階段で我慢してって。

橋 階段は1番いいって言うから。

L そうですね。

橋 そのあと正式な、たとえばカルテに載るような障害名って付きました？ ずっと自閉傾向のままだった？

L いやぁ……最初はBだったんだよね、療育手帳も。そのあと書き換えの段階で、周りの人たちはまだBのままだったんだけど、3年更新でしたかね？ だから2歳半でついで、5歳とか、なかよし学園に行っている最中かな、Aになりました。

橋 そうなんですね。

L Aで知的障害。重度ですね。それでやっぱり、小さいときから人と交われずに、なかよし（学園）のなかでも隔つこのほうでおとなしくやっているっていう感じの子でしたね。

橋 人と一緒にというよりは、自分で……。

L そうですね。それで、こだわりもすごくあったようでね。当時、ドアとかの開閉にすごくこだわりがあった。

橋 ぴったりか、全開かみたいな感じ？

L 開けたり閉めたり、開けたり閉めたり。

橋 それは、小さい頃だけ？

L そうです。

橋 そのあと、違うことが始まったりとかしなかった？ なにかが終わるとなにかが始まるっていう（笑）。

L ね。でも小学校のときは、それがなくなったんだよな。

橋 支援学級とかで、それで困らせたりとかはしなかったんだ？

L なかったです。でも行きたくなかったんじゃないかな、とにかくね。

橋 え、学校？

L 私は毎朝学校の裏門に車を止めて、行きたくないから髪の毛を引っ張られて。毎日遅刻。そこで闘って。

橋 へえー。

L それで、落ち着いたと思ったら連れて行って。もうみんな、体育館で走ったりとかしてて。

橋 もう始まってて。

L 走らない。走るのが嫌だったのかな。わかんないけど、もう終わった頃に行くからさ。いつも朝走ってなくて。教室行ってからも、もうひとりの補助の先生とかにもけっこう……。

橋 それは意外だ。それって低学年のうちですか？

L 低学年ですね。1年生、2年生。で、先生たちも困って、2年生からは支援学校の先生を入れましたもんね。異動になってきて。3、4年生のときは男の先生かな。

橋 だけど、朝行っちゃえば大丈夫？

L 行っちゃえば大丈夫。学校から「迎えに来てください」っていうことはなかった。行くまで、かな。

橋 学校に入りたがらなかった。車には乗るの？ 朝、学校に行くよって。

L うーん、乗ってましたね。乗せてたんだね。

橋 そこで、降りない？

L まだ軽かったから、抱っこして乗せたのかな。

橋 小さい頃はね。うちは建物に入れなくてかそういうのはなかったんだけど。で、やっぱり学校とかも行ってしまえば、ぜんぜん普通でした。

L でも、先生はすごい苦労したと思う。オムツもとれない状態で学校に行って。

橋 え、でもわりと普通ですよ。

L ほんとですか？

橋 うん。小学校くらいは。

L おまるを持ってきてくださいって言われて。トイレ指導を学校の先生がやってくれて。教室が校長室の近くだったので、校長先生にオムツ取り替えてもらったりとか（笑）。

橋 あはは（笑）。学校によってそのへん分かりますね。なんか奥のほうに、え、どこにあるの？ そういう子いるの？ という学校と、ほんとうに入ってすぐとか、校長室の隣とか。

L うん、だから良い学校だったと思います。だから選んだんだと思う。お兄ちゃんの学校ではなくて。校長は代わったんですけどね。当時見学に行ったときの校長先生じゃない校長先生だったんですけど。

橋 校長先生もね、だいたい2、3年で代わりますもんね。

L でもすごく良い先生でね。2年ごとに校長代わってたね、そういえば。

橋 うちの、小1から支援学校だったから、おまるとかもすごく普通だったので。

L うちの支援学級だから、普通じゃないんですよ。

橋 また違いますよね。

L 先生、ほんとに頑張ってくれたなと思いますね。なのでやっぱり、いまだにその先生とか、当時のクラスメイト、一緒に入学した子とかは、東京とか行っちゃってるんですけど、たまに連絡とって会いに行ったりとか、こっちに来たりとか。繋がっていますね。

橋 じゃあ、そういう良い先生もいたから、3.11のあとも小6に上がっていて、同じ担任で、10人くらいで。

L そうですね。無事に過ごせましたね。

橋 ただ地震とかあると、怖いっていうことは覚えたっていうか。

L そうですね。怖いのを覚えた。

橋 映像とかはどうですか？3月とかになると、そういう映像すごく流すじゃないですか。

L 見てないんじゃないかな。

橋 嫌だっという感じはあるの？

L どちらかと言うと、テレビよりもタブレットとか携帯とかを見る子なので、テレビだったらアニメとか。でも、あのときよく我慢したよね。ずっと同じコマーシャルとかで。

橋 そうそう。ずっとACでね（註：震災後は通常の企業CMの放送が見送られ、その空白を埋めるために「公益社団法人ACジャパン」のCMが繰り返し放送された）。

L そうそう。でも、映像とかあまり見ないな。見せないようにしてたわけじゃないけど、見ない。

橋 うちの音かな。速報の音とか、速報がテレビの上に出たりとか。大きい地震だと切り替わっちゃうじゃないですか、番組が変わってしまうでしょう。うちテレビがとにかく好きだから、あれがキツイの。不満だし。まただー！って。地震も嫌だし、番組が切り替わっちゃったりとか、地図がずっと出てたりとか、ああいうのがすごく嫌なの。

L そうねー。でも、うちの映像はあまり見ないのかな。今はタブレットで自分の好きなものとか見せて。

橋 タブレットとかって、時間でやめられたりとかします？

L できません。

橋 できないよね（笑）。最初のうちは時間でやってたんだけど、やっぱり、今もうぜんぜんやめられないから。

L ですよ。そうなんです。

橋 まあ、やめられないよね。だって、どんどん同じような見たいものが入ってくるし。

L でもまだ幼いので、「おかあさんといっしょ」の音楽とか聞きながら、「アンパンマン」とか「ドラえもん」とかそんな世界なので、うち。でもずっと見てますし、あとはいまは、地図。話がぜんぜん飛んじゃってあれですけど、うちの母の実家が山形でね、けっこう車で家族で行ったりしてて。覚えてるんだよね、場所をしっかりと。それで、仙台からGoogle（マップ）とか開いて、写真でずっと追って、実家の写真出してたとき、びっくりしました。

橋 えー！すごいな。Google使いこなしてますね。道、覚えますよね。うちの看板とかがものすごいから。お店も全部覚えてるし。次はここに行きたいとか。

L うん、それありますね。

橋 うちはいまインドカレー屋が好きなんです。いっぱい増えてるから。

L あら！すごい。いろんなところ行ってるの？

橋 そう。私とは行かない。お父さんと週末に行くんだけど、次はあそこに行きたいとか、あそこ駐車場ないよとか。お父さんもインドカレーが好き。結局父親も好きだから、喜んで連れて行くから好きになるのよね。

L かわいいね、でもね。

橋 外国人の人たちがやってたりすると、カタコトの日本語でとかね、逆にあんまり色眼鏡で見られなくて、お父さんの居心地がいいみたいで。

L ああそうか、それはありますね。楽かもね。なるほどね。

橋 日本人ばかりのところよりも、お父さんは楽なものもあるみたい。

L いいですね。いろいろ広がって。

橋 まあ、ヘルシーなものならいいよね。野菜カレーとかね。でもタブレットね、なかなかね。どんどん時間が伸びていって、どんどん目も悪くなるんだけど、切り上げるのが大変。

L そうね。見ながら行きたいところを、そのままこう字で書きますね。

橋 ああ、すごい。

L ファミリーマートとかさ、コンビニばかりなんですけどね。

橋 じゃあやっぱり視覚的に、字とか道順とかも見てるから、強いんですね。

L そうですね。覚えてる。欲求がやっぱりすごいです。どこ連れてけ、あそこ連れてけ。

橋 アートもやってるから。色彩とか形の感覚もあるのかな。

L 形はあんまり感覚弱いですね。色だけ。

橋 あ、同じです。色優先の人なので、形はもう……。小さい頃、形を描くものはなかった。

L 同じです。認識がね。

橋 だからそれを、どうしたらいいんだろうって。人の顔を描くことはこの子はないんだろうなって思っていたけど、小2小3くらいから、ボランティアで来てくれている大学生の子とかが、すごくイラストが得意な子で、いろいろ描いて見せてくれたりとか。で、それを描いたものを残してくれたりとか。それで見て学んだんだよね。そのあと、学校の小3小4くらいに美術の先生が来て、「え、美術の先生にできんの？」みたいに周りのお母さんとかは言ってたけど、大人しい先生で、うちは波長が合って、その先生が顔の描き方を教えてくれて。「目があって、鼻があるよね。これだよー」とかをすり合わせて教えてくれたみたいで、顔が描けるようになった。

L すごい。

橋 だから、ボランティア君と、その先生の2ステップで、「え！ なんとなくだけ顔描いてる」って、びっくり。どうやって教えたんですか？ って。

L ね、なかなか描けないですよね。ほんとに周りの利用者さんたちはすごく上手で。うちはほんとうに色だけ。

橋 みんなそれぞれだからね。すごい、線で描くもんね。

L そうですね。それしかできません。

橋 でも、それはそれですごい才能。置き換えれば、頭を切り替えれば、そうだから。形を描けなくても、色でいけば。

L 形どおりに塗れないんだよね。線が強くて。

橋 あ、塗り絵はできない。

L 同じです。でも色使いとかは、絵の具だったりクレヨンだったり、素敵なので。

橋 いろいろそういうので出会ったので。これ差し上げましたっけ？ 余談なんだけど、忘れちゃうので。うちは、ちょうど10歳で震災の半年後くらいに、県の障害者センターの書道教室があったの。書道体験教室。それで、障害者センターだからもちろん障害者向けなので、じゃあ行ってみようと思って、すぐ帰るのもいいやと思って連れて行ったら、すごく良い先生で。書家なんですけど、すごい良い先生で。しかもユウヤがすごく大丈夫な人で。そこからずっとその先生に指導してもらったりして、いままでずっと続いているので。そのグループ展があるので、ぜひぜひ。

L 6月ですね。

橋 いろんな障害の方の作品とか。これは息子ではなくて、ほかの方なんです。それぞれすごく味がある。いい展示、グループ展になるので。うちの息子は他の人と一緒にできないので、マンツーマンでやってもらってるんです。なの

で、ほかの方たちの作品を見るのも楽しみです。

L なるほど、そうですね。すごい。

橋 でもそれも結局、震災のときにお楽しみがなにもなくて、ごめんねって。なにか趣味みたいなことを見つけてあげたかったけど、見つけてあげられてなくて、あなたにはなにもなくてごめんねって。見つけてあげなきゃってそのときにすごく思った。なにやってたんだろう私、みたいな。

L でもすごい。そんななかで、ちゃんとね。

橋 でも、それでもし波長が合わなかったらすぐ帰ってた。たまたま出会って、すごく良い先生で。うまーく「ああ、いいな、いいなー、この線がいいなー」って、すごくのせてくれる。

L 出会って大事だよな。

橋 けど言葉だけじゃなくて、その先生がほんとうに「え、俺には書けないよ、これ」みたいな。「真似できない」って、すごく面白がってくれる方なので。

L もともと書道とかに興味があったわけではなく、行ってみようかって？

橋 うん、だって汚れが……（笑）。とても家ではそんなこと、私はさせてこなかった。

L そうか、嫌だもんね。

橋 クレヨンでも嫌だって思ってたけど。そして、やんない。やらされることはやらないの。で、やっぱり母親ってやれやれオーラがすごいから（笑）。私がやらせるっていう感じのことはぜんぜんのらなかったんだけど。家ではやらない。その先生との場所でだけ、頑張る。

L へー、素敵ですね。すごいいろんな色が出てますもんね。ねー。

橋 でも、それもやっぱり私は3.11ですごく学んで、そのあと出会いがあったから。いままでは、続いていることは「よく頑張ってるな」って褒めてあげて、すごい褒め倒して（笑）。ほんとうに本人はその場にちょっとしかいないんだけど、すごい褒め倒して、写真撮ってとか。ふふふ。

L いろんなところに作品が、みなさんの目に触れる機会が多いので、すごいなって。

橋 「あなたには強みがあるよ」って。「あなたはこれが得意なんだよ」っていうのをね、やっと見つけられた。

L 良かったです。

橋 でも、震災のときはなにもなかったんですよ。

L うちもなかったですよ。プールぐらいで。プールと、あとは低学年のときに、やっぱり色が得意だったのか、飴。いろんな色が入っているフルーツの飴を買ってきて、舐めて皿に並べてたの。グラデーションみたいにして。「あ、これキレイ」とか思って。もしかしたら色彩豊かなのかなーなんて思っていたぐらいで。あとはやっぱり、中学に入って、陶芸の先生との出会いがあって。あの放デイに行ってから、いろんな人に「実はすごいんだね」っていうのを引き出してもらった。実はっていうか、たまたまクレヨンの重ね塗りがキレイだったので。

橋 なんかちょっとずつステップになってるね。本人のなかでは。

L そうですね。

橋 そこでお母さんが、その場所を選んだから。

L そうですね。たまたまね。たまたま中学校で陶芸班にいたっていうのもあったので。その陶芸つながりで、なんかやりたいってことで。

橋 あーそうなんだ。

L そうです。そこで学年ごとに変わるんですけど、2年生か1年生のときに陶芸班で、で、陶芸ってことで。

橋 え、うち中学のとき陶芸班なかった気がするな。高校からだだったかな。すごくやらせたかったの。私も好きだし。私もやりたいぐらいの感じ。それでちょっと体験も放デイ（放課後デイサービス）でやらせてもらったりもしてたんだけど。そこは、機会がなくて。本人ものらなかったのかもしれない。まあ、でも書道のほうにいったからあれだけど。

L そうだね。うちも、陶芸よりもクレヨンでしたよ。いまも別の先生と一緒にやってますけど、でもあんまり興味ない。色塗るのが楽しいみたい。

橋 そうなんだ。でもそういうのも見てわかってきたから。

L そうですね。

橋 好きなことで、無理のないことで。

L 出歩くのがとにかく好きで。

橋 だから、買い物にも並べたし。

L たぶんね、震災で、必然的に大勢のなかで生活しなくちゃいけなくなって、それでまあ最初は落ち着かなくて、いなくなったりもしたけど、そこで少しずつこう、協調性ではないですけど、人と交わることが嫌ではなくなってきたのかなって感じはしますね。

橋 かなり大きな体験だけど。避難して、大勢のなかにいるって。

L 頑張りましたからね。

橋 まあ3日間頑張っただけで、きっと後でプラスになってる部分があるね。

L プラスになったんでしょうね。隣の人に「ちょっとだけ見ててください」っていうのもあったんですよ。たまたまその人に偶然このあいだ会って、「覚えてますか？」とか言われて。主人がほら、有名人だからさ。

橋 そっかそっか、わかるもんね。

L 「えー!？」って言ったら、「あのとき避難先で隣にいたんですよ」と言われて。「ちょっと見てくださいって……」

橋 最近ですか？

L 最近ですよ。「そんなことお願いしたんですね、私……」とか言いながら。「でも大丈夫でしたよ」っていうのもありましたね。

橋 それもすごい。

L だから、たくさん大変なこともあったけど、そこでの経験なのかなって、私はいま思っています。下の子が人のなかにも大丈夫になったってところがね。

橋 お母さんもきっとすごく……ちょっとだけけど他人に任せたとかね。

L そうですね。たぶん自分がトイレに行くときかな。きっとお兄ちゃんと同じタイミングだったんだよね（笑）。

橋 仕方なく。だけどそこで、ステップになってたんだろうし、そのあとお兄ちゃんのお友達の中に入って過ごすことも、ちょっと楽しみを覚えたんだろうし。

L そうですね。いまはうるさいぐらい。文字を書くので、自分の行動を文字で書いたものを人に読ませるっていう。文字による行動確認。

橋 人に読んで欲しいんだ。それは、決まった人に持っていく？

L いやぁ……。

橋 あ、誰でも？

L 誰でも。ちょっと怖いですけどね。まあ、でもいまの生活のなかでは、そうですね。話が飛び飛びでごめんなさい。

橋 ううん。いまは生活介護にいるってことですね。24歳？今年25歳？

L うんとね、早生まれなので、25歳の人たちと一緒にですね。

橋 うちはいま23歳で、今年24歳です。ここ（生活介護の施設）ができる前は、ちなみにどこに？何年かありますよね？

L 別のところの生活介護で。

橋 これまでの話をまとめると、困ったことは、脱走したりとか。家が大丈夫なら家にいたかったけど、どうしても避難先になきゃいけなかったし。食べるものは限られていたけど、ちょっと食べるものも広がったっていうか。本人も仕方なく。

L そうそう。

橋 よかったことは、けっこういろいろあって、お兄ちゃん存在が大きくて。お兄ちゃんがもうちょっと上だったら、またちょっと違ったかもしれない。その中1くらいまでって、たぶん優しく……。ほかのお友達も受け入れてくれて、そのなかに本人がいて、楽しい時間もつくれてっていうのは、すごいほんとうにうらやましい。よかったことだと。あと、お薬とかは？その頃、服薬とかは？

L なかったですね。してないですね。

橋 じゃあ、避難先でお薬で困ることはなかったね。

L なかったですね。それはほんと助かりましたね。

橋 いまこうやって話していると、どんどん思い出すじゃないですか。思い返してみても、まあ避難しないとイケないような状況になるっていうことが、やっぱりある。そういうときに、発達障害で自閉症の人たちに、なにがあればいいって思います？

L ねえ……。

橋 いまもたぶん避難所って……。あのあと、福祉避難所を見直そうみたいなことは、議員さんたちも言ってくれたりとかあったけど、結局あまり変わってない。それってまあ、みなさんに理解をしてもらえてない。こっちも働きかけができていないってことはあると思うんだけど。なにがあればあのとき助けになったんだろうっていうのは、私はなんとなく、避難所の一角に別スペースを……なかじゃなくて、別スペースでなければ、うちの息子はいられないなって。

L そうねえ……。

橋 でっかい福祉避難所を想定してもらったとしても、うちはそのなかにたぶんいられないんですよ。ちょっと「離れ」的な、テントでもいいから、みんなとちょっと離れたところみたいなスペースでないと、いられないんだなっていうこととか。それはいまだからはっきりわかることなんだけど。

L ほんと最初、ドキドキでしたもん。居場所がね。ほんとにやれるのかなって。

橋 「ごめんなさい、ごめんなさい」ってしなきゃいけない。

L ほんと。いつ脱走するかわからない、声を出すかわからない、食べられない。ほんとうにそうです。自分のスペースがあればなって。やっぱりスペースは欲しかったですね。安心して生活ができるスペース。

橋 音的にも、できればちょっと遮断できたらいいなって。

L そうですね。ほんとそう思います。周りに理解をって言っても、なかなかできないことなので。

橋 でも、その知ってもらうことも、親たちがどう情報発信したらいいかってなかなか難しいじゃないですか。

L 難しいですね。

橋 百人百通りで。うちはこうなんだけど、彼は違うから、「うちはこうで！」って言うのもちょっと違うかなって思うし、みんな違うから。

L そうですね。ほんとに肩身が狭かったし、よく頑張ったなって。

橋 それは、ほんとうに褒めてあげていいと思う。

L ね、ほんとですね。ほんとうによく頑張ったと思う。

橋 自分もだし、息子さんと、お兄ちゃんも。

L ね。ほんとに、そんなスペースがあれば、あのときどれだけ安心して過ごせたかなって。脱走することなく（笑）。

橋 小さくてもいいんだよね。広くなくて、ちょっと遮音性がある、とかを私はイメージするんだけど。それは、理想的にはね、いくつかあればとってもありがたい。家族単位で収まれば。

L そうですね。ほんとうに助かります。やっぱりいろんな人がいるのでね。たまたまよかった人もいたけど。

橋 だって、ペットちゃんのこととかね、避難所にペットを入れられないから、じゃあ外に繋いでとか、ペットちゃんたちのスペースをほかにって、わりと進んでいってると思うんですよ。でもどうしてこっちは……

L ね、人間なのにな。

橋 それって、やっぱり知ってもらうことが足りないのかなって。だけど、その発信も難しい。でも、今日はとてもありがたいデータをいただいたので。

L いやいや、なんか余談ばかりで。

橋 いえいえ。ほんとうに。でも、学校の先生から安否確認とかがなかったっていうのは……。

L あ、安否確認はありました。

橋 見に来なかったですか？ たまたま会えなかったのかな。

L そうだと思う。ただ、その脱走したときに先生が来てたんだな、うちのマンションに。それだ、それだ。

橋 じゃあ、脱走のことは把握してもらってたのかな。

L そう、そのとき来てた。

橋 でも、ゆっくり相談とかする時間はなかったのね。

L そうですね。なかったかな。

橋 安否確認はあったんですね。だいたいやっぱりみんな、担任の先生とかがまわって行って。

L そうだ、そうだ。脱走したとき、たまたま先生がそこにいたんだ。来てくれていたときに、一緒に探して。

橋 なんか、いつもバツタリすごい（笑）。

L そうなの、偶然。そこで避難先まで一緒に歩いて戻ってきたんです。そうさそうさ。

橋 そうか。でも、そういうの思い出してくるでしょう？（笑）

L そうそう。あのとき避難先まで一緒に歩いてくれた。来てくれてた。だから会ったのか。

橋 そうだよ。じゃあ先生は、脱走したけど戻ったっていうところとかもわかっていて、それで安心して。

L そうか、だからか。なんで先生がいるんだろうって思ったんだよね。そういうことだね。

橋（笑） そのとき大変だったからね、お母さんは。

L そういうことだ。

橋 それどころじゃなかったもんね。

L なんているんだろうって。いま結びつきました。そうなんだよ、きっと。

橋 よかった、思い出して。

L ほんと、なんで先生ここにいるんだろうって。

橋 安否確認がなかった人の話を初めて聞いたーと思って。

L ああ、ほんと？ あー、そうか。

橋 そういうことだ。

L いるはずのない人がいるわけだからね。主人と偶然っていうのは、まあほんとに偶然だったんだけど。

橋 あと最近ね、「私、避難所で隣にいたよ」っていう方の話も、びっくりです。

L そう、びっくりしましたよ。えー?! でした。

橋 そういうことはあるんですね。

L 驚きました。

橋 ほんとうにありがとうございました。お忙しいのに時間つくっていただいて。

L とんでもないです。